

平成 27 年 4 月 2 日

九州大学大学院経済学研究院

産業マネジメント専攻長 平松 拓 殿

出張報告（記録）書

報告者

ICABE 学生交流推進プロジェクト

教員 岩下 仁

学生代表 大淵 和憲

ICABE学生交流推進プロジェクトによる出張を下記の通り行いました。ご報告申し上げます。

記

1. プログラム名称

ICABE 学生交流推進プロジェクト(第 23 回)

2. 用務地・用務先

タイ バンコク

チュラロンコン大学ビジネス・スクール、現地企業 (U-THAI PRODUCES, THAI NIPPON RUBBER INDUSTRY)

3. 用務の概要と事業の関連について

〈用務の概要〉

現地企業様訪問、ビジネスプラン・ディスカッションとプレゼンテーション

〈事業の関連〉

\*International Consortium of Asian Business Education(ICABE)に基づく学生間交流、現地企業訪問を通じて、現地の最新事情の把握、タイ経済・文化に対する理解を深める。

\*チュラロンコン大学 MBA英語プログラムの学生とのネットワークの形成。ビジネスプラン・ディスカッションとプレゼンテーションを行い、両国経済・社会の相互理解とアントレプレナーシップの育成につなげる。

4. 出張日程 平成27年3月13日(金)～ 3月16日(月) (現地4日間)

5. 参加者 合計7名 (教員2名 学生5名)

〈教員〉 平松 拓教授 岩下 仁講師

〈産業マネジメント専攻10期〉1名 石井邦博

〈産業マネジメント専攻12期〉4名 大淵和憲 砂山洋樹 長谷川貴一 岩中浩二

6. 日程詳細

【3月13日(金)】

10:30 福岡空港 出発

14:00 バンコク・スワンナブーム国際空港 到着

19:00 QNIES (QBS Network for International Exchange Students) メンバー (元交換留学生) との会食

【3月14日(土)】

8:30 チュラロンコン大学にて同大ビジネス・スクール学生と合流

9:30~11:00 現地企業 U-THAI PRODUCES 訪問 活動報告書①

14:00~16:00 現地企業 THAI NIPPON RUBBER INDUSTRY 訪問 活動報告書②

19:00 チュラロンコン大学ビジネス・スクール (CBS) 修了生との会食

【3月15日(日)】

11:00~12:00 CBS 訪問 チュラロンコン大学構内見学

13:00~16:30 CBS 学生との共同グループワーク 活動報告書③  
(ビジネスプラン ディスカッション、同発表)

【3月16日(月)】

2:15 バンコク・スワンナブーム国際空港 出発

9:10 福岡空港 到着

7. 学生リーダー所感

今回訪問したタイは65歳以上の高齢化率が9%台であり、日本の25%と比べると若い労働者人口の割合が非常に多い国である。我々が訪問したバンコクやその中心地のサイアムには多くのタイの若者が集い、街の活気を感じることができた。また、街の至る所に日系レストランや日本語広告があり、タイ国民の多くが親日家であるという理由もうかがい知る事ができた。実際にチュラ

ロンコン大学の学生と情報交換を行った際には、日本語を話せる学生が多く存在し、人気の海外旅行1位は日本という事も納得できた。

また、学生交流においてはチュラロンコン大学の優秀な学生とのワークショップは、その語学力のみならず考え方にも影響を受けた。自分の言葉で自分の考えを伝える事ができなければ、今の急速に変化しているビジネス環境で日本は取り残されるのではないかと懸念を感じた。そうならないためにも、世界の現状を自身の目で受け入れ、自身が成長していく事で日本と世界との溝を狭める事が出来ればよいな、と考えさせられたツアーとなった。

最後に、現地企業訪問及び大学訪問においてご多忙にもかかわらず温かくお迎え頂いたことに感謝の意を述べたい。

報告書担当 岩中浩二(12期)

## 【活動報告①】 U-THAI PRODUCES

### <企業訪問>

日時 : 平成 27 年 3 月 14 日 (土) 9:30~11:00  
訪問先 : U-THAI PRODUCES (以下「U-THAI」、CBS によるアレンジ)  
記録者 : 長谷川 貴一 (12 期)  
参加者 : QBS : 平松教授、岩下先生、大淵リーダーら計 7 名  
CBS : Nuttapol 先生、CBS 英語プログラム学生 15 名

### 1. 企業概要

バンコク中心部から北に車で 30 分の位置に立地しており、タイのトップブランド米であるジャスミンライスを主として米の選別、クリーニング、パッケージングを行っている。製品はタイ国内だけでなく OEM として外国企業にも販売している。

### 2. 施設見学

本社ビルでは抜き取り調査による品質検査を実施しており、隣接した工場では米の選別・クリーニング・パッケージングを行っている。

また、タイの認証機関である SGS が発行する HACCP (Hazard Analysis Critical Control Points) を取得しており、HACCP に従って品質を管理している。

工程は以下のようになっており、開梱とパッケージング以外は大型の機械で実施される。なお工程の開始から終了までの所要時間は 1 時間程度である。

#### ① 開梱

タイ米が大小様々な袋で輸送されてくるため 1 箇所 4 名の作業員で次々にベルトコンベアへ流していく。

#### ② 入荷試験

#### ③ プレ・クリーニング

#### ④ クリーニング

#### ⑤ ホワイトニング、カラーリング

#### ⑥ パッケージング

製品別にラインが異なっており、OEM 先によって大小の袋やプラスチック容器などパッケージングが異なる。

### 3. 労働環境

工場は 24 時間稼働しており従業員は交代制で勤務している。品質確保のため工場内の湿度を 14% に保っているが、温度管理は行っておらず設備も老朽化している。この影響ためか、我々の立場からみると作業のスピードは遅く人員も多いが、労働環境への投資よりも人件費が安

いことが伺える。

#### 4. 所感

集荷された米はランク順に No.1 Jasmine Rice、No.2 White rice、No.3 Glutinous Rice に選別されるが、パッケージされた 3 商品を確認したところ全て中国向け製品であった。また見学に参加したタイ人学生に普段どの米を食するか問合せたところ、White rice か Glutinous Rice と返答があった。これらから、製品のポジショニングを分けタイ米トップブランドである Jasmine Rice を海外へ輸出し収益を上げていることが推測される。また Jasmine Rice を試食したところ、日本米と比較して細く噛み応えは少なかったが味は良く、米におかずをかけて食することが多い東南アジアの食事には適していることが理解できた。日本においてもカレーや丼物へ適用できる可能性があるため、少量の単位で販売すれば需要を創出できるかもしれない。



タイ米の品質検査の説明を受ける



パッケージされたタイ米は中国への輸出用



チュラロンコンの学生と一緒に工場入口で記念撮影

以上

## 【活動報告②】 THAI NIPPON RUBBER INDUSTRY

### <企業訪問>

日 時 : 平成 27 年 3 月 14 日 (土) 14:00~16:00  
訪問先 : THAI NIPPON RUBBER INDUSTRY (CBS によるアレンジ)  
面会者 : Pisut Chanwatarungkull (Management Representative)  
記録者 : 砂山 洋樹 (12 期)  
参加者 : QBS : 平松教授、岩下先生、大淵リーダーら 計 7 名  
CBS : Nuttapol 先生、CBS 英語プログラム学生 15 名

### 1. 企業概要

1993 年に設立され、事業内容はコンドームの製造。訪問した工場はバンコクから南東に車で 1.5 時間の Pinthong 産業地区に立地している。

タイ・日合弁でスタートしたが、現在はタイ企業。しかし、ブランドが確立しているため社名は変更していないとの説明。

設立当初の生産能力は年 6000 万個であったが、2007 年には年 7 億個、2012 年には年 20 億個に拡大し世界トップクラスのコンドーム サプライヤーである。

また製品の内訳は自社製品 32%、OEM 60%となっており、製品は世界 70 ヶ国で使用されている。

### 2. 施設見学

工程は以下のようになっており、型取りは 24 時間、それ以外は 26 日/月稼働している。またタイ国からの大規模受注に備え通常時の工場稼働率は 90%に抑えている。

- ① 型取り (ディッピング)
- ② 洗浄 (クリーニング)
- ③ 乾燥
- ④ 目視確認
- ⑤ 品質試験
- ⑥ 密閉
- ⑦ パッケージ

### 3. 労働環境

2011 年の洪水後に新しい工場群として誘致された Pinthong エリアに立地している。コンドームという人体に触れる製品を製造しているため ISO9001、13485 や 510K (FDA) など各

種認証を取得しているおりプロセスや設備が良く整備されている。

各所見学時だけでも 200 人近くの労働者が作業していたが単純作業が多く、製品の品質管理のため私語禁止となっている。(ピンホールや破れの見逃しは 100%避けねばならない。) また工場見学も積極的に受け入れており、見学者へのサービスが行き届いている。

#### 4. 所感

コンドームの製造というニッチな産業に特化しているが、形、サイズ、色や匂い以外にもスパイラル/W スパイラルなど新しい製品をメーカーとともに開発し、Playboy などグローバルメーカーの OEM 先として地位を確立している。また市場規模も、2012 年で 37 億ドル、2018 年には 54 億ドルに成長する見込みである。この理由としてコンドームを知らない地域が多く残っており NGO、国家、企業によって需要が促進されることがあげられる。

企業リスクとして天然ゴム資源をどうやって確保するかが考えられたが、タイは天然ゴム生産量世界 No.1 であり、またゴム低価格化もあいまって良質な低コストで仕入れやすい環境であったことがわかった。一方で、世界 No.2 の天然ゴム生産量を誇り生産コストも低いマレーシア企業が最大の競合相手となっており、今後は価格、品質に加えて別の付加価値が期待される。

参考情報：サイズのトップはオーストラリア、長さは南アフリカであった。



記念品の贈呈を受ける平松専攻長

会社ロビーにて集合写真

以上

### 【活動報告③】 チュラロンコン大学訪問

〈チュラロンコン大学訪問〉

日時：平成 27 年 3 月 15 日（日） 11:00～16:30

訪問先：チュラロンコン大学（Chulalongkorn University Business School, CBS）

面会者：チュラロンコン大学教員：Prof.Nuttapol、学生：9 名

参加者：平松教授、岩下先生、大淵リーダーら 計 7 名



（写真：校舎前を歩く参加者）



（写真：Nuttapol 先生）

〈学内見学内容〉 11:00～12:00

Nuttapol 先生引率のもと、チュラロンコン大学の構内を歩いて見学。

タイ随一の総合大学であるチュラロンコン大学は 16 学部を擁し、バンコク中心部にありながら広大な敷地にキャンパスが広がっている。建物に見られる装飾や建築様式の荘重さはどれもタイの“看板”大学に相応しい趣であった。



<チュラ大学生との昼食>12:00~13:00

大学構内にあるレストラン「Somboon Seafoods」でチュラロンコン大 MBA 課程に通う現役学生らと会食。活発な意見交換を行うとともに懇親を深めた。

<ワークショップ内容>13:00~16:00

チュラロンコン大学・Nuttapol 先生による基調講義

「日本人とタイ人のイメージを抽出し、双方のギャップを把握した上で相互理解を図る」ということを目標に、トピックやフレームワークについての紹介がなされた。

文化の要素として Hofstede 及び Hall から採り上げた 6 つの観点、即ち①個人主義と集団主義、②不確実さを避けるか、③男性性と女性性、④パワーディスタンス、⑤長期のオリエンテーション、⑥高-低コンテクストに関して、日・タイ間の相違点についての質問を通じ、概念理解を深めた。

その上で「日本人はナショナリストであるか」「日本人は集団主義者であるか」「日本人高齢者のライフスタイルは何であるか」「なぜ日本人はタイを選ぶのか」などの質問についての考察を行った。



## 2. ワークショップの趣旨説明 (Nuttapol 先生)

テーマを”Mutual Understanding: Regenerating for Traditional Industry between Thailand and Japan”として、QBS 学生側が準備した問題提起トピックを踏まえてタイへのビジネス輸出・輸入の在り方について討論を行った。

## 3. ビジネスプランワークショップ (75 分間)

2 グループで 75 分間ほどディスカッションを実施。

## 4. プレゼンテーション (グループ A,B の 2 チーム)

<各チームのビジネスプラン・ディスカッション内容について>

以下、発表順に各グループの発表内容を概説する。

#### 【グループ A】

記録者：岩中浩二（12期）

チームメンバー QBS：（12期）砂山、長谷川、岩中

チュラロンコン大学：Pornjed Sakgitjarung, Pimjai Suksavasde, Tanawat Bunkitrungpaisan, Pisit Kunjara（4名）

#### ○ディスカッション内容

QBS チームが事前に準備していた、「高齢化社会の日本」に対するタイの人材活用による介護サービス事業の可能性を紹介。日本人の4人に1人が65歳以上である点、人口減少による労働人口の減少から、介護従事者の人員不足について課題を紹介。

EPAを利用して東南アジア諸国から日本への看護師活用事例を紹介するも、やはり日本で働く点では言葉の障壁が大きく、被介護者も文化が異なる国の若者に介護される点について難色を示すのではないかとクロスカルチャーについて十分理解を深める事ができた。



実際にタイの若者を活用し人材バンクなどの形で日本に対するビジネスを行う際、前述の文化の問題と合わせて、福利厚生や給与、儲かる仕組みという点で議論が熱くなった。そもそも日本の若者を医療従事者へ仕向けるために高賃金などのインセンティブが必要であるが、タイに賃金の安さを求める事であれば誰も日本に行きたがらないのでは？との指摘があった。一方でタイの人に日本と同等の賃金を払うのであれば、日本人を雇用する事と同程度に人件費がかかるため、人材バンクとして利益が出ないのでは、との指摘もあった。

最終結論としては、ビジネスモデル構築の 9 つの要素をもとにじっくり議論する事が必要であり、その中で異文化の相互理解が欠かせないという事で議論が落ち着いた。

#### ○所感

Nuttapol 先生からは、親日家の多いタイの若者であれば日本で働きたいというニーズのある人が多いのではないか? とのご意見を頂いた。また文化の違いは微妙にあるにせよ、タイと日本は基本的に丁寧、礼儀正しい、相手を尊重するなど、共通する点も多いため、文化の障壁は受入側の日本人高齢者にあるのではないかとコメントがあった。また、ビジネスとしての視点が欠けているため、もう少し QBS チームとして議論して臨む必要があったと感じた。

## 【グループ B】

記録者：大淵和憲（12 期）

チームメンバー QBS：（12 期）石井 （12 期）大淵

チュラロンコン大学：Rut Witsarut, Jirawat Kim Harnsiriwatanakit, Tugsgorn Shoksheeshai, Pynit Wonnaphahoun, Pearperry Rodsuebsuk（5 名）

### ○ディスカッション内容

冒頭 10 期石井さんから日本の多岐にわたる伝統工芸品の種類を、PC の画面を囲んでチュラロンコン大学生に紹介。その後、日本の伝統工芸品の例として福岡の伝産品である「博多織」を取り上げ、12 期大淵が博多織の実物の帯を提示しながら説明を行った。



これらを踏まえて、博多織を日本からタイに輸出して販売するにあたり、何が課題で、その上で何が必要であるかを検討した。タイ人学生からは博多織がはらむ問題点として「単価が高すぎる」「タイ人に関連した歴史がない」「博多織という名前が覚えにくい」などの指摘があった。

続いてタイ人学生からは博多織のタイ国内での販売展開について 2 つの改善点の提示がなされた。

一つ目は「博多織」という名前についてで、博多という地名を説明するストーリー展開を行うことで商品の背景的知識を広めることが可能となる。その上で現在の毛筆体の博多織のロゴに加えて、外国人向けのより認識されやすいロゴの考案が必要である、というもの。

二つ目はプロダクトに関して、タイ人の日本旅行におけるお土産としてのニーズをまずは基本とすべきと指摘。タイ国内での販売においては織布をより小さな大きさと高価格を維持して販売すること、また部屋の装飾などへの利用も提案された。これらの要素を十分に理解し実行することで、タイ国内の富裕層への認知度向上やブランド意識の定着に向けた取り組みが可能になる、という結論になった。

○所感

上記のディスカッション内容に対して、Nuttapol 先生からは「日本の伝統工芸品である博多織がタイ国内で同じように利用されることはあまり考えられないことは、文化の相違の観点からも当然である」「タイでの絹製品の販売についてタイシルクのブランドであるジム・トンプソンなどの販売手法などを学ぶことがとても参考になるのでは」などの有益な指摘を得られた。



岩下先生による講評



平松先生による講評

以上